

四半世紀の時の流れと世代を越えて

拙書「重い障害のある子どもへの援助のために－重症心身障害児教育入門－」を目にした遠方にお住まいの方から、次のような初メール（抜粋）をいただいた。

【 わたしは〇〇病院に勤務している5年目の看護師です。

昨年から重症児病棟に配属になり勤務しております。

病棟の本棚にあった阿部さんの本を発見して読んでみました。とっても感動してまたがんばろうと思いました。

昔の本だったので今はご活躍されていないかな…と、試しにインターネットで検索したところホームページを見つけてとってもうれしくなりました。

勇気づけられました。これからもがんばってください。

いつかお話しを聴きに伺いたいと思います。

わたしもがんばります！ 】

「昔の本だった」とのことで、7年前からの改訂版ではなく、恐らく四半世紀前の初版を目にしてくださったのだらうと思う。

また、ある学生からも、【 大変中身の濃いお話、ありがとうございました。本も大切にしたいと思います。もっとたくさんの人にこの本を読んでいただきたいです。 】とのメールもいただいた。

30代半ばに執筆を勧めてくれた先輩に、原稿の途中を見てもらった時、「専門書らしく『～である調』で書くように！『話しことば調』では、出版社に推薦しかねる。」とアドバイスされた。

自分としては、単に重症児関係の知識・情報の紹介やその解説の書でなく、重症児問題を通して教育、福祉、等々の真髓を共に考えていただくために、語りかけ問いかけるには「話しことば調」が最も適切と思い、このアドバイスだけはどうしても受け入れられず、故に自費出版に踏み切った経緯がある。

四半世紀という時の流れを越えても、また、異なる専門分野の方や世代を越えて今の若い人からも共感の感想をいただくと、出版への想いを込めた「話しことば調」であったからこそと思えて、しかもわざわざの初メールなだけに、自分としては何とも嬉しい。

こうした方々がいてくださる限り、これからも増刷を続けたいと思っている。